

氏名（本籍）	ムラ オ リ ナ 村 尾 里 奈（高知県）
学位の種類	博 士 （美 術）
学位記番号	博 美 第 162 号
学位授与年月日	平 成 18 年 3 月 24 日
学位論文等題目	〈作品〉 隠れ処、大階段、周界の帯 〈論文〉 空間としての彫刻

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教 授	（美術学部）	木 戸 修
（論文第1副査）	〃	助教授	（ 〃 ）	越 川 倫 明
（作品第1副査）	〃	教 授	（ 〃 ）	手 塚 登久夫
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	米 林 雄 一
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	林 武 史

（論文内容の要旨）

本研究は、彫刻を物の存在感や形の面白さというよりも、空間そのものの在り方や感じ方として考える「空間としての彫刻」の制作研究である。ものの内側から醸し出すような空間性ではなく、空間そのものが満ちあふれてくるような空間性、空間に輝きをもたらすような表現は如何にして獲得できるかということをお私に考えてきた。私にとって彫刻とは、一つの空間の状態であり、彫刻制作とはいかにこの空間の状態を作り出すかということの意味してきた。本論文は、私の大学院における作品制作に加えて今までの考えを整理するものであり、私が「空間としての彫刻」を如何に考え、取り組んできたかを追うものである。

本論文は6つの章から成る。〈第1章 彫刻とは何のことか〉では、大学院での研究に至るまでの経緯を述べるとともに、彫刻という言葉が意味することを論じる。〈1-1 彫刻という言葉〉では、作家としての根本的な考えと、彫刻に対する思い入れやこだわりについて述べ、〈1-2 彫刻との出会い〉では、彫刻との出会いを通じて彫刻の根本的な性質を「空間を感じさせるもの」であり、また「命を感じさせる存在感」であると考えようになったことを述べる。〈1-3 人間と外界〉では、人間の存在をその周囲に描くことによって実現するという事に関心を持ってきたことについて述べ、空間というもののへの興味が、人間の存在とその周囲について考えるところから来ているということ述べる。第一章の目的は、私が「空間そのものを彫刻と考える」ということを論じるにあたっての、「彫刻」という言葉が含む意味を明らかにするものである。

〈第2章 空間を彫刻する〉では、空間そのものを彫刻として考えること、そして空間そのものを表現にすることは如何にして可能かという問題提起から始まる。〈2-1 空間としての彫刻〉では、空間という捉えどころのないものを、私が如何に限定して考えてきたかということについて述べ、〈2-2 空間の主題化〉では、今まで様々な作家によってどのような空間の表現がなされてきたかに触れるとともに、私が主題化しようとしている空間の在り方について述べる。〈2-3 空間の命〉では、空間に命を与えるということが可能であるかという問題提起とともに、音楽を通じて得た感覚などと照らし合わせながら考える。

〈第3章 空間の輝き〉では、空間を輝かせるために具体的にどのようなことに取り組んできたかを作品制作の事例とともに明示する。〈3-1 地の空間〉では、彫刻が現れる前提として横たわる空間を「地の空間」と考え、その地の空間に切り込むことが空間を輝かせることに通じるのではないかという考えについて論じる。〈3-2 空間の差異〉では、空間を彫刻だと感じるには、そこに空間的な差異、すな

わちずれがなければならぬのではないかと考えてきたことについて述べる。空間と空間とが擦れ合うところに輝きが生まれるのではないかということ、具体的な作品の事例を交えながら論じる。〈3-3 ものと空間-比重の接近〉では、ものと空間の存在感における比重について取り上げる。ものは強すぎるとそれだけに目がいってしまうため、ものを黙らせることによって、空間に発言権を持たせ、双方の間に地続き性をもたらすことが可能なのではないかということについて述べる。〈3-4 色と湿度〉では、空間ともとの地続き性において、色がどのように貢献するかということについて具体的に上げる。

〈第4章 彫刻の現れ〉では、彫刻の現れ方に焦点を当てる。〈4-1 現出物とフリーズ〉では、石を掘る彫刻家が内側から形を導き出すようにではなく、私にとって彫刻の現れとは、そこに現れ出る物を凍結させるといったニュアンスに近いということを述べる。〈4-2 入り口、展開、出口〉では、観者が作品と向き合うことによって生じる3段階の現れを取り上げ、観者（作者）と作品との関係性が空間にどのように作用し、また形となって現れるかを論じる。

〈第5章 身体感覚の投影〉では、身体感覚を彫刻に投影させることについて論じる。〈5-1 胴体投影〉では、自分の存在を安定させている胴体感覚を彫刻に投影することについて、〈5-2 空間の分割〉では、空間を人間の存在感を感じさせる大きさに分割することについて、〈5-3 アイデンティティーの空間〉では、自分の中に蓄積された経験としての空間について述べ、提出作品《Hiding Place / 隠れ処》について触れる。

〈第6章 新たなる旅立ちへ〉では、大学院での研究の末にたどり着いた問題点が何であるか、また作品を今後どのように展開していきたいかということについて述べる。ここでは、幾度も直面する場所の問題についての考えと、私がもう一歩踏み込んで獲得したいと思っている空間の領域について述べる。